

井手 みえこさんを偲んで

植村 猶行

卒業と同時に記者として日本農業新聞社に入社した貴女が、初めて私をお訪ねくださって、「ガーデンライフの編集部に入りたいが…」と話されたのには驚きました。創刊5年目で、その年も新入社員を1人貰って、総勢7人になったばかりで、応じることができませんでした。

その翌年海外旅行が解禁になり、アメリカ西海岸の花事情視察が実現し、総勢131名で、貴女もご一緒に出掛けましたね。

園芸文化協会で協力

一方私は、社の了解を得て、昭和40年に(社)園芸文化協会の理事に就任し、常務理事だった上司の小松崎英男氏と共に、会報の編集を担当していましたが、誌名を「園芸文化」と改題して月刊化した折、貴女にお手伝いをお願いしましたね。

その後、貴女も協会の参事に就任し、日本橋三越本店の「花の文化展」や、新宿御苑の「園芸文化展」の企画や設営は勿論、記録誌の編集まで手伝っていただきました。

大阪花博'90でもまた

平成2年4月1日から9月30日までの183日間、大阪市の鶴見緑地で開催された「国際花と緑の博覧会」では、私が政府苑の花と緑担当のプロデューサーで、貴女は電通・東急エージェンシー合同の専門家集団の一員として、展示・運営の計画立案と推進などの仕事に参画し、昭和62年12月11日から平成2年11月30日までの間に、24回ものプロデューサー会議を開いて精力的に討議検討しましたね。特に貴女は「フラワーワールド」の担当者として、大変苦労されましたが、その過程で多くのことを学び、以後の活躍の基礎となったように思われます。

意志の強い男勝り

貴女の努力と意志の強さは抜群で、常人の遠く及ばないところ、俗に言う男勝りで、稀に見る逸材でした。「花葉会」でも2001年に岩佐吉純幹事長の後を受けて代表幹事に抜擢されましたが、病を得て、その真価を発揮できなかったのは、返す返すも残念です。ご冥福をお祈り申し上げて筆を擱こう。

井手 三重子(いでみえこ)の履歴

1944年 昭和19年1月2日 東京都品川区生まれ

四人姉妹の次女

太平洋戦争のさなか、生地西品川は日本で最も早く空襲



2001年9月花葉会総会にて

を受け、父親が出征したので同年の夏、葉中他の親類がある伊良子岬に疎開した。疎開先の家は地域の温室園芸の指導的役割を果たしており、後に井手みえことして仕事をするにもお世話になった。

品川区で三ツ木小、伊東中学で過ごし、川崎市の向ヶ丘遊園に転居して、ここから都立明正高校、千葉大学に通った。高校で文芸部、卓球部で、なぜ園芸学部を選んだのか理由はよく分からない。父は法律関係だったが、母は化学。一族は理系、工学系が多く、姉が生物部で採集した植物の標本づくりを年中手伝っていたことも関係あるかもしれない。入試が終って問題一つ間違ったのが合否の境目だと言っていたが、落ちたと思っていたら4月1日になって補欠合格の連絡が来た。本人曰く正真正銘のビリ入学、卒業はビリから3番目だと自慢していた。

学生時代には晴海でしばしば開かれた大規模な国際見本市のアルバイトで、美大生にもぐりこんで模型作りや図面かき、展示などを体験していた。学生の頃、古在由重氏が父親と同じ大学に移ってこられ、子供たちがクラスメートだと親同士話題にしたと聞いている。

1967年卒業後、農業新聞就職は、本人の文学趣味と専攻が生かしたスタートだった。その後出版界と園芸との組み合わせは、学部の強力な人脈のおかげで、先輩に引き立てていただき、自分の感性と環境を軸に時代の方向を自然にたどって行けた。1972年カナダ留学、カルガリーやアルバータ大学等の講座で先住民と民俗学的植物誌に目を向けるようになった。

姉妹の中で最も気が強く、勝負事にも強かったのに、つましく生活を楽しむだけで、全般に不確かなことは決して手を出さない。良くも悪くも受けた教育の科学的訓練の結果であると言っていた。巨大資本を動かせる立場だったら何をしたか、やらせてみたかったと家族としては思う。

(姉 井手 暢子)